



目 次

○21世紀へ向けたキャンパス情報システムの構築を 大型計算機センター長 栃内香次…………… 1	○お知らせ……………14
○大学とインテリジェント化 情報処理教育センター長 塩崎洋…………… 4	○特別寄稿……………15
○海外の図書館事情…………… 5	○本学教官著作物……………18
○研修・講習会などから…………… 9	○研修・講習会等……………18
	○会 議……………19
	○人事往来……………19

21 世紀へ向けたキャンパス情報システムの構築を

大型計算機センター長 栃 内 香 次

本学の点検評価報告書は「北大のルネサンスを目指して」という表題である。この言葉が端的に示しているように、北大は今、創基約 120 年を迎えるとともに、21 世紀への新たな飛躍を目指すスタート台に立とうとしている。このことは、大学の研究と教育がますます厳しい競争の場におかれている中で、北大は我が国の基幹総合大学の一つという立場を名実ともに確立することを求められていることを意味する。現在多くの学部、部局で進められている様々な改革の動きは、具体的内容はそれぞれの部局の特質により異なっているが、本質的にはすべてこの一点を指向しているといえよう。

北大が自らに課されているこのような大きな使命を達成しようとするとき、まず第一に求められるのは当然のことながら大学の構成員の資質の向上であろう。これは、研究、教育の直接の担い手である教員の場合と、それを様々な形で支援する職員の場合とでその具体的な在り方は異なるであろうが、本質的には同一であると考えられる。

しかしながら、大学がより高度な研究、教育の場を目指すとき、「人」に加えて、研究、教育支援のための各種のシステム、とりわけ情報システムの充実が重要である。非常に単純化した言い方ではあるが、大学の使命を一言でいってしまえば、様々な多様な「知識」を作り出し、人類の歴史と共に蓄積されてきた知識のデータベースに付け加え、さらにそれを外に発信して

行くということになるであろう。そして、この「知識」を種々の多様なメディアの上に実体化し、蓄積、発信の対象として具体化したものが「情報」ということになる。したがって、情報の蓄積、処理、発信のためのシステム、すなわち情報システムは大学にとって必須の基盤であると言えよう。

さて、現在北大に存在、あるいは構築中の研究、教育支援のための情報システムの主なものをあげてみると、以下のようになる。

システム名	担当部局
1. 図書館情報システム及び総合情報ターミナル (構築中)	附属図書館
2. 北大教務情報システム (構築中、一部稼働中)	事務局
3. 教育用情報システム (システム増強計画中)	情報処理教育センター
4. 多機能視聴覚教育施設 (計画中)	言語文化部
5. 大型計算機システム (スーパーコン及び汎用計算機)	大型計算機センター
6. 情報ネットワークシステム (HINES)	同上

これらの各々は、その設立目的によりサービスの対象範囲は異なっている。例えば、図書館情報システムは大学の最も基盤的な (また最も長い歴史を持つ) 情報サービスである図書館機能の電算化計画に伴って設立されたシステムで、学生から教職員に至る広い範囲をサービスの対象としており、一方、大型計算機センターは研究のための共同利用計算サービスを行なう機関で、主たる対象は教官及び大学院学生の、しかも研究のための利用である。

一方、1989年に北大情報ネットワークシステム (HINES) が稼働を開始し、全学の主要な計算機システムと各部局の研究室その他に設置されている多数の端末機器、パーソナルコンピュータ、あるいはワークステーションが相互に結ばれ、自由に情報を交換できるネットワークコンピューティング時代を迎えた。さらに、本年1月からは既設 HINES 通信網に加え、マルチメディア時代に対応してより高速、大量の情報伝送を可能とするスーパー情報ハイウェイが設置され、より緊密、高速な情報ネットワークを実現できる道が開かれた。

このような時代において、上記それぞれの情報サービスシステムは今、大きな変容を求められている。本稿の始めの方でも述べたように、現在、北大全体が改革のさなかにあるが、そのことと、上に述べたようなキャンパス情報ネットワーク基盤の実現とは決して偶然の一致ではなく、大学の改革という基本的な流れを実現してゆくために、キャンパス内情報インフラストラクチャの整備が必須の要件であるという共通の認識が形成されつつあるからであろう。

それでは、上記各々の情報システムに求められる変容は何であろうか。それは各々のシステムの役割がしだいに融合し、相互に協力、影響しあいながら更なる高度な情報サービスの実現を目指すことである。この問題は昨年ほぼ1年にわたって、学部一貫教育実施準備委員会の中の第三専門委員会においてその担当項目の一つであり、上記のような方向を目指すに際し、現在のシステムにはどのような問題があるか、それぞれの運用も含めて総合的な検討が行なわれた。以下、そこで取り上げられた主要な項目2, 3をご紹介します。

1) 教務情報システムへの外部からのアクセス

教官、学生それぞれからのこのシステムへのネットワークを通じてのアクセスの要望とセキュリティに十分配慮する必要があることとの調和。

2) 大型計算機センターシステムの学内利用

大型計算機センターの計算機システムのもつ情報処理能力をより多様な利用に供することと、全国共同利用施設であるというセンターの性格の調和。

3) 端末機の相互乗り入れとオープン端末

学内の任意の場所から自由に各システムにアクセスできるようにすること、特に学部学生が常時自由に利用できるオープンな端末機の設置の必要性。

4) 情報教育の将来のありかた

現在のいわゆる情報処理教育のイメージを超えた、世界を結ぶ情報ネットワーク時代における情報リテラシー教育の必要性。

5) 各機関の交流、情報共通化

研究教育支援のための種々の情報システム間でシームレスな情報流通を実現するための体制作り。

以上の諸項目を取り上げ、検討してきて一つ明らかになったことがある。それは、これからも相当長期間にわたって大学の、特に学部教育の主要な形態である「講義形式の授業」を直接支援する(できる)情報システムがほとんど存在していないことである。今日すでに多くの大学で種々の情報メディアを駆使した授業が行なわれており、一部の大学では、通信衛星を利用して1ヶ所での授業を全国に分散している教室に配信し、各教室間を結んで双方向授業を行なう試みなどまで行なわれている。これに対し、筆者の知識不足かも知れないが、本学ではそのような動きは、情報処理教育センターを除いてはほとんど見られず、現在計画中の言語文化部における多機能視聴覚教育施設の計画が当初から教育支援情報システムを意識したほとんど最初のものではないかと思われる。

この問題は、本学に限らず国立大学、ことに旧制大学からの伝統を持つ大学全般に見られる一種の特徴かも知れないが、21世紀を目の前にするとき、やはりこれは「特徴」ではなく「欠陥」として捕えるべき問題であろう。

繰り返しになるが、北大は今、21世紀における我が国の基幹総合大学の一つとしての使命を帯び、それに向けての改革の最中にある。恐らく「キャンパスのインテリジェント化」は、この改革の流れを象徴する主要なキーワードの一つであろう。本稿で述べたいいくつかの情報システムとそれらの今後の変容の方向は、このようなインテリジェント化されたキャンパスにおける基盤情報インフラストラクチャを実現するために必須のものであると考えられる。

以上、北大の情報サービスシステムにいささかのかかわりを持つ一人として、私見を述べさせていただいた。末尾ながら、この機会を与えて貴重な紙面を提供して下さった三本木館長を始め図書館の関係各位に感謝します。

1995. 2. 21 記

(工学部教授)

大学とインテリジェント化

情報処理教育センター長 塩 崎 洋 一

昔から私たちは自然界の美しさを愛で、またその厳しさや穏やかさ等を四季の移り変わりや気候の中に感じて、リズムのある生活を送っています。多数の人がそれを生活の励みと感じていることが詩歌、絵画の世界から感じることができます。私たちは数え切れないほどの自然界の規則性に囲まれ、それから多数の恩恵を受けて生活しています。私たちは自然に逆らわず、それを利用して豊かになろうとします。このとき学ぶ対象は自然そのものです。自然界の現象が私たちの生活に関わるものとしてみたとき、私たちが生来本能的と思われるほど努力無しに体得しているもの、時間をかけて習得するものなど様々です。自然界でも物質が移動したり、個体から個体へ力が伝わるのに時間がかかることは自然の法則としてよく知られていることです。

私たちが習得しなければならないものには、更に社会生活に関する色々な事柄があります。これも生来本能的に習得されるものから人格形成の時代をへて習得されていくもの、一生かかって習得するものなど多彩です。こういうものが社会の規律、習慣を作っていくのでしょう。自然の規則性、社会の風習などいろいろなものが「常識」として私たちに要求されることが常日頃です。

私たちは日常の生活でいわゆる「常識」を数多く持ち、それに逆らわずに行動することが大抵の場合です。通常の「常識」とは異なり、ほんの少し専門的なこと等、少し何かに通じている人の持つ知識が「情報」として大切に扱われることもよくあります。情報通などという言葉のあるのもこのためでしょう。私たちの日常生活で「常識」の範囲はきっと限られています。これについての物覚えの良くない筆者の論拠はなんでもかんでも覚えていることはできないという処にあります。旅行先で交通機関が止まり正常になるのがいつなのか判らない時がたまにあります。そのようなときは大変な思いをいたします。これはその時、正常であった場合の「常識」が何であるかを知るよい機会だと思えます。最近の神戸市内の大災害のとき、その渦中にあった方々は大変な思いとご苦勞をされた事と思えます。

昭和30年代の頃は市外電話をかけるのは大変なことでした。電話局に申し込んだ後は、あなた任せで忍耐強くつないでもらうのを待ちました。これもその時代の「常識」だったので。それが今では多数の外国とダイアル即時通話ができるようになり、思ったときにすぐに会話が出来ます。まさに隔世です。最近インターネット経由のパソコン通信が発達してメッセージを数秒にして地球の裏側まで送ることができるようになっていきます。日本国内宛でも外国宛でもまったく同じ便利さです。このような事情は電子情報工学の進歩に裏打ちされた社会の発達そのものでしょう。もちろん現在の社会は多数の分野で通信関係の発達に劣らないコンピュータ化がなされています。そこではそれぞれ必要な最新の「情報」を膨大なデータベースとして所有して事業が展開されています。

今後の社会は増々このようなコンピュータ化された一面を持つ構造に発展していくものと思われています。大学においても「常識」の一部として増々「コンピュータ化」の導入がなされ、それと共にコンピュータ化されたデータベースも重要視されることになるでしょう。当然のことながら教育内容の「常識」も一部変貌していくでしょう。この「常識」の変化はお金を

使って電線を張り巡らし、それにコンピュータを接続すれば成るといふわけのものではありません。電線とコンピュータが同じでもそこにどんな「情報」を乗せることができるのか、どのようにそれが利用されるのかといったことがその成果に大きく影響するでしょう。コンピュータを如何に利用するのかという点ではどの分野の方も専門家です。これからもそれぞれの分野の努力が積み重ねられてコンピュータ化を受け入れた大学の「常識」が創られていくだろうと思います。

現在、北海道大学は全学の情報処理教育のために情報処理教育センターを所有しています。そこには汎用大型機と約480台のパソコン、ワークステーションが学内LANに接続され全学で80科目の授業のために稼働しています。今までの年間の利用学生数は3,500名にのぼります。これは学部専門教育の授業と一般教養の授業を含んでいます。平成7年度からは学部一貫教育に学制が変わります。今まで行われていた一般教養の授業がなくなり、全学共通教育として入学初年度学生の約8割の学生約2,000人が情報処理教育を受講することになります。コンピュータを用いた教育が初等教育課程から高等学校の課程まで進んで来ました。大学はそのような教育を受けて成長した若い学生を受け入れるのです。情報処理教育センターは入学初年度の学生には情報処理機器を文房具として自由に扱えるような設備を整えトレーニングするのです。各学部固有のコンピュータ化された専門教育に備えることになります。このトレーニングと共に何を教えるのか、これには一つには纏めきれない広く分布した考えが多数有ります。その中で目だつものとして「コンピュータ化された世界におけるモラル」というテーマがあります。これは大変大きな大切なテーマであると思います。このテーマは人格形成に直接関わるもので、とても情報処理教育の授業だけで全うできるものではありません。情報処理教育センターがこのことでお手伝いできる処は正しい手順に従ったコンピュータの扱い方または利用法を教えることでありましょう。またこのテーマに関しては、そこで扱われる「情報」の質が間接的にも影響を持つことは言うまでもないことでしょう。

21世紀に向かっていかに大学が「コンピュータ化」されていくのか真剣に考える時期になっていると思います。これを使おうと考える人は誰でも「コンピュータ化」を考える専門家です。専門家の強い情熱が求められています。

(理学部教授)

◆ 海外の図書館事情

BLDSC, 英国大学図書館の旅

教養分館情報管理掛 佐々木 光子

1. はじめに

1月下旬、教養分館〔教養部廃止により平成7年度より北分館と改称〕にも4月からの本稼働を目の前にして附属図書館新システム用ワークステーション、Xステーションが搬入された。早速覗いてみる。モザイクを選び試運転中の“北海道大学総合情報サービス”から“北大内のWWWサーバー一覧”を選択、メニューを次々クリックしていくと「内閣総理大臣官邸」やTulips(筑波大)等他大学の蔵書目録、サービスデータを自由に楽しめる。

実は昨年9月、私はこの首相官邸の画像やスピーチデータ、TulipsやWine(早大)など

をロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・ライブラリー (London School of Economics Library = LSE) において、その学内情報サービス・システム「N-INFO」の説明を受けながら見せてもらっていた。初めて英国の大学図書館を訪ねた7年前(楡蔭 No. 73, '87. 拙稿)は北大の CLARK も開始直後で、ロンドン大学の各図書館も OPAC は自館の蔵書検索のみで、COM (Computer Output on Microfiche) が図書館間の情報交換手段と言う状態であった。この間、高度情報化社会の先進米国の最新情報・調査報告等は、大学図書館分野にも日本のモデルとして大量に流入してきているが、欧州からの情報は非常に少ない。今回の北大国際交流事業基金に拠る英国の図書館訪問の旅は、長い伝統と歴史の上に培われた英国の図書館サービスがコンピュータ化、ネットワーク化に拠って更に飛躍的に拡充され、着実な利用者サービス向上が実現されている様子を尋ね歩く絶好の機会となった。

2. 英国のネットワークと BLDSC

英国には、我国の NACSIS-CAT や米国の OCLC のような大学図書館の大多数が参加する全国規模で構築する書誌ユーティリティは存在しない。しかし、大学図書館では CURL (Consortium of University and Research Libraries, ケンブリッジ, オクスフォード, ロンドンなど7大学参画データベース, 書誌精度の高さ, 無料等利用度が高い) 等, 又地域ネットの LASER (London and South Eastern Library Region), あるいは BIDS (Bath Information and Data Services, サイテーション・インデックス等のサービスネット) というように, JANET (Joint Academic Network, 英国内の学術・研究機関を繋ぐ学術情報 WAN) 上には個別図書館の目録も含めて多種多様なデータベース情報が行き交い、ネットワーク上で相互にデータを提供・共有し合うことで、相互利用・資料の有効利用を実践している。英国図書館文献サービスセンター (British Library Document Supply Centre = BLDSC) はこのネットワークの要として、英国内のあらゆる図書館の相互利用活動のバックボーンの役割を果たしている。私自身にとっても、参考調査掛・医学部閲覧掛を通して雑誌論文探しの最後の拠り所であった。

なお、英国図書館 (British Library = BL) のロンドンサイトは1759年設立以来250年間本拠地としてきた大英博物館から程近いサント・パンクラスに広大な新図書館を建築中で赤レンガのビルはほぼ出来上がったかに見える。今年のパンプでは、'96年サービス開始との案内、サント・パンクラス、キングズ・クロス両駅に隣接する新館での新たな活動の展開が期待される。

さて、BLDSC はイングランド北部、ヨークシャーのポストン・スパののどかな農耕地のど真ん中に忽然として建ち現れる。スタッフの説明では「放射線汚染に強い」窓の少ない巨大なコンクリート打ちっばなしのビル。米国研修から帰国途上の阪大・山崎目録掛長とご一緒し、まず発注・受入から書誌作成 (UK MARC) まで各部門の仕事を案内してもらおう。途中書誌部でファンクションキー1ヶでアラビア語やキリル文字に変身する魔法のキーボードに驚嘆したりしながら、いよいよ、情報処理工場と言われている ILL (Inter-Library Loan) の部門へ。

BLDSC の「1993/94 サービス統計」に拠れば、年間 ILL 受付件数 370 万件 (英国内 285 万件, 国外 85 万件 = コピー 79 万件, 貸借 6 万件), 1日平均 14,000 件。対する充足率は DSC 所蔵分のみで 89%, バックアップ・ライブラリーを含めると 93% と高い。受付から数時間以内、遅くとも 48 時間以内の発送を旨とするその姿はまさに世界の BLDSC と言うにふさわしい。スピードアップ化で、依頼方法も郵送が年々減少し (34.2%), コンピュータ電送が増加 (52.8%)。

この高い充足率は700万件(図書300万, 雑誌25万タイトル, 学位論文50万, 学会・会議録33万...)を上回る所蔵資料に拠るが, この1年間の子算は400万ポンド, 雑誌47,000タイトル, 図書26,000冊, マイクロフォームレポート11万件等の収集に充てられている。これら資料と利用者の接合点に約750名のスタッフが活躍している。申込受付専用のコンピュータ2台, 隣室では5台のプリンターがフル回転でオーダーフォームを打ち出す。書架の建ち並ぶ各階には各種複写機・コンピュータが配置され全館に敷かれたレールをオーダーフォームやコピーの入った送付Boxが走り回り, 最終的に1階で包装・発送されるまで作業は徹底的に機械化・合理化され, ビル側面の発送口には1日5回郵便車が回ってくるとのこと。ビル内には, セールスアップを目指す国別, 地方別, 依頼方法別セールス統計表が掲示されていたりして, 一方では現在のあり方の不経済性が指摘されたりするという状況のなかでのガンバリ振りも伺われた。

我国のBLDSC利用は, 1994年4月から学術情報センターNACSIS-ILLによるサービスが開始され, 各大学からOnlineでリクエスト, 翌日センターから転送する方法で以前より少なくとも申込郵送時間の短縮が実現した。4月から1月末迄のDSCへの登録館72館, 依頼実行館67館, 依頼件数は約1,000件とのこと。北大の同期間中の海外への依頼375件中DSCへは約150件(内貸借11件)であった。なお, DSCではBlaise-Line情報サービス部門を見学後, '95より販売開始予定の雑誌フルテキストをイメージデータとして送りつけるという新製品のデモを見せていただき退出した。

3. 大学図書館のOPAC

まず, 訪問先大学図書館を簡単に紹介し, 後, 印象をまとめてみたい。

「地方の中堅大学の模範的図書館として, 建物もサービスを是非みてきたら!」と薦められて訪ねたラフバラ工業大学図書館(Loughborough University of Technology: Pilkington Library)は, ロンドンからヨークへの



ラフバラ工業大学のOPAC: Network Information Workstations
白木で区切った沢山のワークステーション。メニューも豊富, デスクも広い



LSEのOPAC

新ワークステーションと自館蔵書検索のみの旧型が混在

途上。広々と緑豊かな構内に '80 年建築の逆四角錐のユニークなデザインのビル、建物中心部に書架を集中し窓周辺を広く閲覧スペースに、備品は全て特注の白木材製で心地よく、業務用備品も工夫が凝らされている。利用者用ワークステーションの台数も提供されている情報の豊かさも、ILL 申込 1 件 4 ポントの支出以外、図書館にきさえすれば世界中のネットワーク上の全ての情報が自由に只で入手できる！

冒頭で触れたロンドン大学の LSE (ここは British Library of Political and Economic Science: London School of Economics の名の通り 2 館の機能を持つ) ではサービス開始から 80 週という最新自慢のネットワークシステム「N-INFO」を見せていただいた。初心者でも容易と言う使い勝手の良さで、ラフバラ同様 On-line information services, NISS, Hytelnet, Gopher, WWW, Networked CD-ROM... と情報提供はケチらない。

そして、英国図書館史を体現してるかのようなオクスフォード大学ボドリアン・ライブラリー。14 世紀に端を発し、その後、1602 年再建開館、英国図書館より 150 年も早い 1610 年にはロンドン書籍組合との納本協定 (現在の納本館は BL, オクスフォード, ケンブリッジ等 5 館) を結び蓄積された資料は、580 万冊の図書を含む膨大なもの。今回は、ボドリアン図書館内見学ツアーに参加してその威光の片鱗に触れさせていただいた後、ボドリアン図書館附属日本研究図書館 (Bodleian Japanese Library = BJL) を訪ねた。英国 CAT は 1990 年に NACSIS と英国図書館との国際接続が実現し、1992 年からは、NACSIS-CAT と接続して日本語資料の入力が開始された。現在、BL, ケンブリッジ, オクスフォード, シェフィールド, スターリング, ロンドン各大学が参加、目指すは英国内日本語資料総目録の編集などである。BJL はボドリアン図書館の日本語図書 63,000 冊、日本研究洋書 9,000 冊、雑誌など多数所蔵し、ボドリアン大学の日本研究図書館として任を担っている。実際の目録業務は、日本国内のサービス時間後、英国時間で午後 2 時から 4 時間が NACSIS 接続の時間、目録端末・ソフト共日本からの提供で、日本人女性スタッフによる書誌作成の作業は私達と同じ (当然か)、書誌調整など大変なので品質管理をよろしくお願いします、とのこと。ボドリアン図書館の日本語・中国語データベースは Allegro と命名され、'93 年 7 月から既に 9,000 データが収納されている。

*ボドリアン図書館 OPAC Menu のを紹介すると ([] が内容)

- 1 BARD Bodleian Access to Remote Databases
[BIDS, OCLC-FirstSearch, Internet, Gopher...]
- 2 OLIS Oxford Library Information System
[Network of libraries, catalogues, Oxford's 62 colleges]
- 3 ALLEGRO (Chinese, Japanese books & journals)
- 4 RSL Radcliffe Science Library
[CD-ROM network, BA, GPO, INSPEC, Medline, etc. 26 DB]

このほかに訪ねたいいくつかの図書館も含めて、印象の 1 つめはやはり、キャンパス・ランに接続されたパソコン・ワークステーションを利用者に多数備えたいという強い思い。

北大の新システムも幅広い利用者層に提供し使用される事によって更に洗練され内容豊かになろう。“総合情報サービス”の実現でメニューの豊かさでは問題をクリアしていても、端末のこの少なさは、なんとも悲しい。旅先で「お宅の OPAC は？」と聞かれ、教養生 5,000 人にたった 3 台でしかも自館データ検索のみとはとても言えず、「新システムに移行中」と…。キャンパス・ランに載せる情報についても、ラフバラやウォーリック等の新進気鋭の大学は、広報、宣伝的内容もたくさんで、北大では一体どんな情報が欲しいのか？ 図書館だけではな

しに協議する場が必要なのでは？

また一方、これだけ情報入手の技術が進んだなかでは、価値ある一次資料の収集、そのデータベース化と提供がいよいよ重みを増してくると、北方資料データベースの事など大量の貴重資料を所蔵する大学としての役割も考える。そのほか、非常に現実的なことだが、どの館も指定図書制度が効率的に運用されていて、貸出カウンターのすぐ側にたっぷり Short Loan Collection を備え、利用規則も細やかにテキストや参考書のサービスをしている。北大は教養部廃止後、さてどうなるのだろうか？ 更に、気配りの行き届いた親切、丁寧なサービス精神には学ぶ事が多い。制度のちがいはあるが、レファレンス・ライブラリアン（サブジェクト・ライブラリアン）の配置と案内、よく検討・準備された用途別多種多様な利用案内、パンフレット、マニュアルの類、各階に多数備えられているコピー機とコピーカード自動販売機（パンフで必ず著作権啓蒙を）など。

以上、次元の異なることどもを乱雑に書き連ねてきましたが、私の報告とさせていただきます。最後に、今回の訪英の実現にかんしてお世話下さいました学内の方々、附属図書館、および教養分館の皆様は心よりお礼申し上げます。合わせて、夏休み期間中にも拘らず親切に対応して下さいました訪問先、英国のライブラリアンの皆様に心から感謝申し上げます。

◆ 研修・講習会などから

「平成6年度大学図書館職員講習会に」参加して

附属図書館情報サービス課参考調査掛 田中健太郎

この講習会は平成6年11月14日から17日までの4日間、東京大学総合図書館を会場として行われました。全国的な研修に参加するのは初めてなので、いささか緊張して会場へと向かいました。

開講第1番目の講義での、「大学図書館の使命とは何か」との、東京大学附属図書館長の厳しい問いかけに始まり、「学術情報システムと大学図書館」、「ネットワークと電子化情報の活用」、「大学図書館電算化システムの実際」など、現在の大学図書館界でもっとも先端的な話題について、日ごろは本や雑誌の中でしかお目にかかれない先生方からの講演が相次ぎました。図書館で働き始めて7年、毎日の実務に追われる中で、ともすれば近視眼的になりがちであった意識に、強烈な刺激を与えられる思いでした。

「大学図書館の協力活動」「参考業務の実際」など、現在の自分の仕事において、すぐに役立つ知識を教えられる講義も数多くありました。どの講義においても、「インターネット」「WWW」の言葉のでてこない時間はないほどで、この話題に対する全国での関心の高さに、まさしく「第三の開国」の時代の到来を予感させられました。

司会の担当を仰せつかった「共同討議」において、国公私立大学、短大、高専など、館種や規模のさまざまな図書館の職員と話をする機会をもてたことも講習会に参加した大きな収穫で、それぞれの図書館が色々な問題を抱えながらそれに対処している事例を聞くことができました。

東大総合図書館の見学もたいへん興味深く、特に「国際資料室」では、日頃頭を悩ませている国連寄託資料の取扱いについて、大きな示唆を与えることができました。また、毎日の昼休

楡 蔭 (北大図書館報)

みには、広い東大構内を何人かの仲間達と散策し、さまざまに語り合えたのも楽しい思い出となりました。

講師の先生方に加え、受講生のために細々とお世話いただいた東大附属図書館の皆様、またこの講習会への参加をうながして下さった上司の皆様、この場をかりて心より御礼申し上げます。また、若い図書館員がなるべく早い時期にこのような研修に参加する機会を与えられますよう希望して、報告いたします。

○ 平成6年度北海道大学図書館講演会が行われました (開催日:平成6年10月6日)

講演1:「宗教における文字と音声」 文学部教授 土屋 博氏

この講演では、宗教をひとつの観点として文化現象をとらえる宗教学の視点から、知識伝達のメディアの変化とその影響について語られた。まず宗教に対する概念が変化しつつある昨今の状況を検証。「宗教は科学の発達とともに衰える」と一般には言われているが、実際には宗教の世俗化、非教会化、個人化なのであり、宗教自体の力は衰えていない。

現代において、自己開発セミナーや占いなどに見られるよう、既成の宗教らしさが希薄になってきている。また宗教の脱イデオロギー化も現代の特徴であり、教義の学習よりも宗教的实践行動に向かう傾向がある。これらは変化と言うよりも、宗教の本来の姿の自覚なのである。

教義という文字のメディアによって語られなくなった宗教は、言葉、音声、ふるまいの中にそのアイデンティティーを見いだしていく。書かれた教義に過度に依存する宗教は、いずれ改革を余儀なくされることになる。宗教の伝播、実践の中における音声の機能の顕著な例として、九州の生月島の「かくれキリシタン」に伝わる「歌オラショ」の一曲「ぐるりよぎ」の録音テープを、その原曲であるグレゴリオ聖歌「Gloriosa Domina」と聞き比べるなど、講演も音声のメディアを駆使したものとなった。

講演2:「図書館サービスと情報アクセス」 図書館情報大学助教授 石井啓豊氏

この講演では図書館サービスの歴史を、情報へのアクセスの視点から、その媒体となるメディアの変化にそって、紙メディア図書館、機械化図書館、電子図書館の三段階に分けて、そのサービスの特徴を検証。さらに、その歴史の延長線上にある今後の図書館サービスについて考察した。



	図書館業務	図書館資料
紙メディア図書館	紙	紙
機械化図書館	コンピュータ	紙
電子図書館	コンピュータ	電子メディア

1. 紙メディア図書館

〔特徴〕

- 利用者と資料は、同時に、同じ場所に存在する必要がある。
- 必要な文献は個々の図書館でそれぞれに蓄積し、利用のために収集整理する。
- 自己充足的な蔵書を構築するという目標が生じる。
- 蔵書の内容、規模、利用のしやすさが図書館サービスの質を規定。

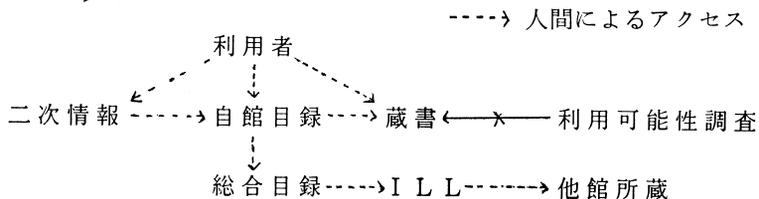
〔問題点〕

- 図書館間で多くの重複が生じる。
- 完璧な蔵書を期すると、膨大な経費がかかる。
- セルフサービスを基調としたサービス体系となる。

〔展開〕

- 単独では必要なものを収集するのは不可能であり、経営効率が非常に悪いことから、資源共有というアイデアが生まれた。

〔書誌的アクセス〕



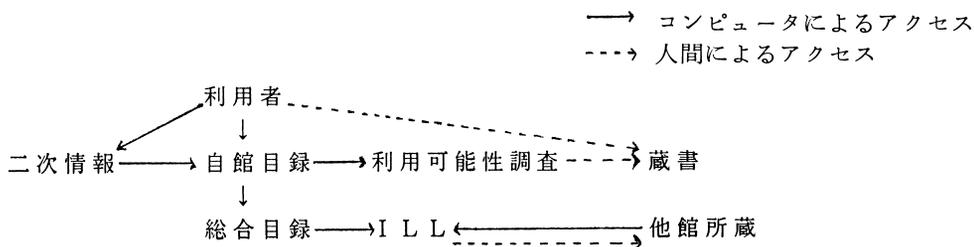
* (目録と業務ファイルのリンクなし)

2. 機械化図書館

〔特徴〕

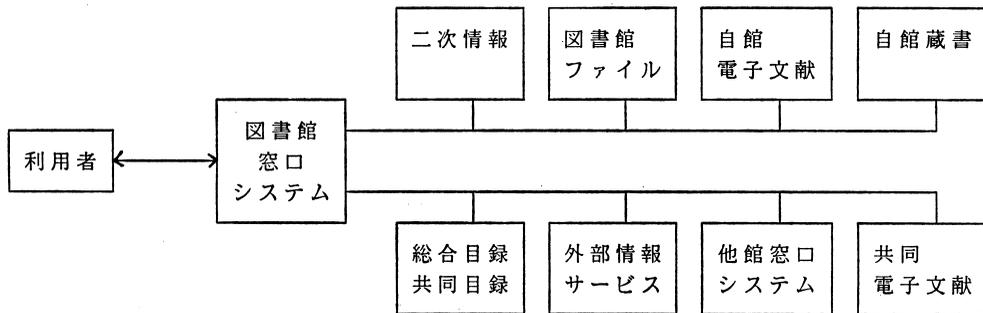
- 紙文献をそれぞれの図書館に蓄積。
- 紙メディア図書館と同様の制約は残るが、オンライン目録により目録へのアクセスの制約が軽減。
- オンライン目録をのぞき、直接の恩恵を受けるのは利用者よりもサービス提供者である図書館の方。

〔書誌的アクセス〕



* (二次資料、目録、業務ファイルの相互リンク)

- 学術情報システムの構造は、伝統的図書館での構造を色濃く残している。
 - 古いメディアを効率よく動かすための技術としてコンピュータを使用。
〔文献アクセス〕
 - 書誌的アクセス、物流、費用負担の全ての段階での、図書館サービスによる中間の処理のカットが望まれる。
3. 電子図書館 (部分的には既に経験している。ex. 情報検索, CD-ROM など)
〔電子文献の特徴〕
- 場所的制約をうけない。
 - 複数の人が同一データを同時に利用可能。
 - 複製が容易。
 - 柔軟性 (改訂, 形式変更, 結合など)
 - 省スペース。
- 〔情報へのアクセス〕



〔電子文献時代の図書館の機能〕

- 情報資源への使いやすいアクセスパスの構築, 確保, ゲートウェイ機能。
- 資源利用を支える会計制度の確立, 予算の確保。
- 電子文献蔵書の構築
- 図書館は多様な情報への窓口となる。

〔新しい展開のための3つの論理〕

- 何でもありの論理 (伝統も先端もなんでもとりこむ)
- 早いものがちの論理 (情報処理部門との競争と協調)
- 成功が成功を呼ぶ論理 (利用者に認められる図書館は, 新しいサービスを展開できる)

○ 第 68 次国立七大学附属図書館協議会を本学で開催

第 68 次国立七大学附属図書館協議会が 10 月 20 日 (木)、本学附属図書館で開催された。

まず、会議に先だて、文部省の木島学術情報課長から、情報のマルチメディア化に対応するため政府並びに各省庁で様々な取り組みがなされていること、文部省としてはこれに対応する文教施策の推進等を種々検討していること、また、大学図書館を取り巻く諸問題および平成 7 年度の学術情報システム関係・大学図書館関係概算要求の概要について説明があった。

また、当日は、会議終了後、平成 7 年 3 月に稼動予定の UNIX ワークステーションによる新北大大図書館情報システムのデモンストラーションを行った。



なお、同会議の前日には、第 27 回国立七大学附属図書館部課長会議が同附属図書館で開催された。

協議事項等は次のとおり

〈第 68 次国立七大学附属図書館協議会〉

- 1 学術審議会部会報告「大学図書館機能の強化・高度化の推進について」に対する対応について
- 2 大学図書館における研究開発機能の整備について
- 3 図書館の組織改変と呼称変更について
- 4 学内メディアセンターに対する図書館の対応について
- 5 学内 LAN の整備と学内学術情報システムの検討にともなう委員会活動と組織について
- 6 学術情報センターの地域研修会の開催について
- 7 地域別保存図書館機能と七大学の役割について

〈第 27 回国立七大学附属図書館部課長会議〉

- 1 学術雑誌目次速報データベース形成事業への対応について
- 2 次期電算化システムへの対応について
- 3 学術雑誌目次速報データベースの入力体制について
- 4 図書館資料のネットワーク化 一紙メディアから電子メディアへの対応一
- 5 UNIX 図書館システムへの移行について

◆ お知らせ

○ 人文・社会科学系の CD-ROM 資料が揃いました

附属図書館では、このたび2階参考閲覧室に下記の人文・社会科学系 CD-ROM 資料を備え付け、検索サービスを開始いたしました。利用は、参考閲覧室の PC を使ったのスタンドアローンでの検索となります。無料でどなたでも検索いただけますのでどうぞご利用下さい。

なお、利用を希望される方は、競合を避けるため前もって附属図書館参考調査掛 (内線 2973) に予約されることをお勧めします。

CD-ROM 資料名:

- ① Books in Print plus
(Bowker-Saur, UK) 1994— (更新年 12 回)
[米国市販図書目録]
- ② Bookbank (British Books in Print)
(J. Whitaker & Sons, UK) 1994— (更新年 12 回)
[英国市販図書目録]
- ③ Russian Books in Print on CD-ROM
(Bowker-Saur, UK) 1989— (更新年 1 回)
[ロシア書籍書誌]
- ④ VLB Aktuell on CD-ROM
(K. G. Saur, G) 1994— (更新年 6 回)
[ドイツ語圏市販図書目録]
- ⑤ Humanities Index
(H. W. Wilson, US) 1984— (更新年 4 回)
[人文科学文献索引]
- ⑥ Dissertation Abstracts Ondisc
(UMI, US) 1988— (更新年 4 回)
[北米及び世界の学位論文抄録]
- ⑦ CD-HIASK
(朝日新聞社) 1985— (更新年 1 回)
[朝日新聞記事全文]
- ⑧ 教育統計データ
(国立教育研究所) 1955— (更新随時)
[学校基本調査, 学校保健統計調査, 学校教員統計調査, 社会教育調査]

◆ 特別寄稿

先に生まれた者は先生

薬学部図書掛長 齋藤 温子

36年間の図書館員生活に区切りをつける日を前にして、最近考えていることを表現する機会を与えられて幸いです。これを読んで意を強くしてくださる方の多いことを願います。

女性の大学進学や卒業後の職場進出もだんだん当たり前のことになり、自活できるようになってきました。結婚も生活の手段ではなく、人生を豊かにする充分条件と考えることができるようになりました。一部の女性にとっては、共働きも家計を維持するためやむを得ないことではなく、社会参加と自己実現の手段のひとつになりました。選択肢は増し、しかも、甘えも許される心地良さがいまはあります。しかしこの先、若年労働者の減少にしたがって女性も職場の補助者ではなく、だいたいな戦力としてその能力を試される時代になって行きます。

図書館は早くから専門性を意識し、能力を磨いて来た女性の多い職場です。私の10年先輩の柳内桂子氏はそのお一人ですが、ご両親を看取るために北大経済学部図書掛を退職されたのち、請われて東海大学伊勢原分館の設立に携わり、日本医学図書館協会加盟を成し遂げて主任司書をなさった方です。その方が定年退職される時、後任は男性を指名しますよ、とおっしゃっていました。それ以前は、私に日本医学図書館協会のめざましい活動を語り、貴女も医学図書館で勉強して、しかるべく能力が生かせるところへ移りなさい、とアドバイスがありましたから、女性の後任のポストを与えないのは怪しからんとそのときは思いました。しかし、いまは柳内氏が熟慮の末、その任にふさわしい人が男性であったのだと考えています。

一方、いまだに性差別意識から抜けられない人もいます。女性自身が女なんだからと考えがちです。職場がお茶の間の延長になってはいないでしょうか。職場で戦死するような男性社会は異様ですが、1月の阪神大震災のように時間の経過と生死が重なっているときにはお茶の間感覚では対処できません。北大附属図書館情報システム課には昼夜を分かたず、電話をかけて対処を急いでもらって来ましたので、ひとしお痛感するのですが、図書館という職場では利用者の求めることに迅速かつ的確に対処することが期待されています。社会が変化しているときは、観察を鋭くし、本来の役割を忘れずに、しかも変化に敏感に対応する能力を養うべきではありませんか。

日本で求められている情報専門家像を図書館・博物館へアンケートを送って調査した研究報告があります¹⁾。そこから、望ましいとされる資質・能力等の上位5位をここにひきうつします。

1. 特に望ましいと考えられる資質

1. サービス精神	43.3%
2. ニーズへの感知力	40.4
3. 視野の広さ	39.4
4. 責任感	22.1
5. 論理的思考力	17.2

2. 特に望ましいと考えられる具体的能力

1. 問題解決能力	58.1%
2. 問題発見能力	48.5
3. コミュニケーション能力	39.3
4. 企画力	35.1
5. 交渉力	5.2

3. 特に必要と考えられる知識・技術		4. 取得することが望ましいと考えられる資格	
1. 情報検索の知識と利用技術	82.4%	1. 司書	71.1%
2. 主題知識	75.0	2. 学芸員	30.7
3. 分類・目録	65.9	3. データベース検索技術者2級	20.0
4. 情報機器の利用技術	49.7	4. 情報処理技術者2種	17.7
5. 抄録・索引作成法	33.3	5. 司書補	15.0

カナダの Vancouver Public Library には“Job Specifications”という職務マニュアルがあります。内容は Library Assistant II, I と Librarian II, I の職階を設け、1. Nature and Scope of Work, 2. Illustrative Examples of Works, 3. Required Knowledges, Abilities and Skills, 4. Desirable Trained Experience, 5. Required Licenses, Certificates and Registrations の各項についてそれぞれ記述してあります。期せずして上記の調査項目にほぼ共通する区分となっています。

Assistant は単純な日常繰り返される業務および専門職員の指示に従って業務を行うとなっており、12年間の学校教育終了、書かれた指示を読み取る能力、正確に遂行する能力が求められます。望ましい条件としてタイピングのコース履修または一般事務の経験が挙げられていますが、資格やライセンスは“None”となっています。

Librarian について、1. では専門職と規定し、参考業務、読書指導、選書、蔵書管理、整理業務、図書館行事の企画・設定をします。さらに、非専門職スタッフへの助言・指示と中級職員 (senior) の不在時には代理責任が課せられます。非日常的なこと、運用方針に関わる問題は上級職員 (superior) へ報告と意見具申をします。それを標準的業務として定着させるかどうかを評価するのは監督者 (supervisor) であるとしています。

2. の具体的な業務例では、専門分野の参考業務、書誌に関するサービス、輻輳した主題の参考質問の解釈と入手可能な情報源の探索から回答へ到るまでの作業、刊行目録・書評など書誌情報のチェック、資料収集、蔵書内容の検討、排架、製本決定、広報、行事計画のほか、特筆すべきはワークショップなどの職務に関係する会合に出席すること、図書館間の委員会活動に参加することを挙げています。

もと北大附属図書館整理課長でおられた浅野次郎氏が、阪大中之島分館 (現阪大生命科学図書館) は職員の勉強会が盛んで、それも勤務時間後に行われるので、終わるのはいつも午後9時か10時頃でした、と事も無げに話されたのが印象的でした。最近やっと北大の中にも自発的に勉強会をもつ機運が強くなっていますが、まだまだ少数の人達のもので、残念ながらほとんどの職員は指示されて、日常業務のためのスキルを身につける研修を受けるにとどまっています。会合に参加できない事情があるならば、他の手段で図書館界の動きや知識を身につけることはいくらかでも可能です。「榆蔭」以外の図書館報に必ず眼をとおしているでしょうか。他館の動き、試みは参考になることが多いものです。図書館・情報関係の雑誌を読まずにすませている人もいます。「医学図書館」「薬学図書館」はじつに役にたつ雑誌です。生命科学分野の図書館員は睡眠時間を割いてでも読んでほしいと思いますし、大学図書館員ならば必ず得るものがあるとお薦めいたします。さらにひとこと、専門職ならば職業費の支出は当然です。

3. 求められる知識、能力、技能では司書職としての知識と訓練、図書館サービスの方法についての知識と遂行する能力、図書館の目的・機構・手続き・奉仕内容・資料について実際に処理できる知識、他館蔵書についての知識が列挙されているのは言うまでもないことですが、

口頭であるいは文書で効果的にコミュニケーションできる能力、利用者が図書館の方針や取り決めに関心を持つようにプロモートする能力を挙げています。

これは特に掛長職員にとって大切なことであると考えます。大学内の事務職の中で、従来から図書掛はじゅうぶん理解されていない点もあります。事務室が離れていることも原因のひとつではありますが、図書館活動がなにものかをわかってもらう働きかけが不足しているということも考えられます。そこで、図書(担当)掛長会議の報告書や図書館活動に関する文書はできるだけ回覧することを平素より心がけてはいますが、やはり、他の部署とは折りに触れて面談することの方が効果的でありましょう。また、これらの能力は利用者教育には欠かせない能力でもあります。北海道情報検索研究会が月例会のほかに年1回行っている研究発表のセミナーは、おおぜいの人前で発表する度胸を身につける練習でもありますが、プレゼンテーションの上手下手は実に聴く人の集中力を左右するものだとよくわかります。

4. 望ましいトレーニングと経験では、大学卒業プラス図書館学校学位にさらに図書館専門職の経験があればなお良いとなっており、5. 必要なライセンス等は、学士学位と図書館学学位となっています。

一言でいえば、Assistant は定型的・指示待ちの作業をし、Librarian は創意的・立案型作業をすることになっていると言えましょう。北大の図書系職員は Assistant にあたる若い職員に比較して本当に創意的・立案型の作業を心がけているのでしょうか。先の阪神大震災では、混乱のうちに現場に取り残されたひとりの救急隊員がとっさに周囲の市民の協力を求め、指示しながら4名を救出したことが報道されました。勿論、救急体制が整っていることが前提ですが、この隊員が任務を深く理解していたからこそ判断したのでしょうか。さらに私自身の反省をも含めて、若い職員に対して職務上の助言や指示が与えられるほどの知識や指導力を養っているのでしょうか。

図書館に永い職員の方がいる日、私に話してくれました。それは、2年雇用の若い職員の人達にも、この職場の経験が次の職場に生かされるように、もっと職場での心構えをアドバイスして上げるべきだと思う、何も言わない方が楽だけれども、本当の親切はその人が成長するように考えて上げるものだと思う、ということでした。私ははっとしました。この人に教えられたと思いました。職場の経験が永ければそれなりに、わかることが多いものですが、意識して過ごす時間と上の空で過ごす時間とでは成し遂げる仕事量が違います。前述の柳内氏のような先輩に恵まれたことが今の私をつくったように、先輩のひとことが明日の後輩を育てるという意識をもってこれからも姿勢正しく精進したいと考えています。先に生まれた者はすべて先生ですから。

参 考 文 献

- 1) 山本貴子, 緑川信之, 松村多美子: わが国で求められている情報専門家像—図書館・博物館における調査—。図書館情報大学研究報告, 11(2): 19-35, 1992.

◆ 本学教官著作物 (本館・分館受贈分)

本学教官の方々から附属図書館に下記の著作図書を御寄贈いただきました。

[本館]

○名誉教授

前田 隆 水と土への旅 前田隆先生停年退官記念会 1994

○法学部

秋月俊幸(翻刻・解説) 北方史史料集成 第5巻: 千島の白波(平田篤胤)・北地日記(久保田見達)・五郎治申上荒増(中川五郎治) 北海道出版企画センター 1994

○経済学部

濱田康行(共著) 中国の株式会社制度と証券市場の生成 日本証券経済研究所 1994

○医学部

神山昭男(共編) 生物リズムの構造 富士書院 1992

神山昭男(共編) A Recent Advance in Time Series Analysis by Maximum Entropy Method. Hokkaido University Press 1994

○スラブ研究センター

原 暉之(編集代表) 講座スラブの世界 第5巻: スラブの政治 弘文堂 1994

[教養分館]

○医学部

神山昭男(共編) A Recent Advance in Time Series Analysis by Maximum Entropy Method. Hokkaido University Press 1994

附属図書館では、本学教官著作物をできる限り収集するようつとめております。今後とも、よろしくご協力下さい。

◆ 研修・講習会等

○平成6年度大学図書館職員講習会について(6.11.14~6.11.17)

(主催) 文部省・東京大学附属図書館 (場所) 東京大学総合図書館
受講者 田中健太郎(附属図書館) 福井みゆき(工学部)

○平成6年度NACSIS-IR講習会について(6.11.21)

(主催) 学術情報センター (場所) 学術情報センター
受講者 高野直樹(教育学部)

○平成6年度電子メール講習会(応用コース)について(6.11.24~25)

(主催) 学術情報センター (場所) 学術情報センター
受講者 山田紀子(工学部)

○新図書館システムワークステーション基本操作講習会について(6.11.25~12.1)

(主催) 附属図書館 (場所) 情報システム課

○新図書館システム講習会について(7.2.16~3.29)

(主催) 附属図書館 (場所) 情報システム課

◆ 会 議

平成6年度国立大学附属図書館事務部長会議 <平成7年1月18日(水)~19日(木)>

場所: 長崎厚生年金会館

第115回教養分館委員会 <平成6年11月22日(火)>

議 題

1. 平成6年度教養分館図書費予算(案)について
2. 平成6年度参考図書・視聴覚資料の選定について
3. 平成6年度教官選定図書の発注について
4. そ の 他

第157回図書館委員会 <平成7年1月31日(火)>

議 題

1. 北海道大学図書館委員会規程の一部改正(案)について
2. 北海道大学附属図書館分館設置規程の一部改正(案)について
3. 北海道大学附属図書館利用規程の一部改正(案)について
4. 「図書館委員会申し合わせ」の廃止について
5. 「北海道大学附属図書館教養分館委員会内規」の廃止について
6. 北海道大学図書館情報ネットワークサービスの利用に関する要項(案)及び図書館情報システム運用方針(案)について
7. 図書館備え付け電子資料の購入計画について
8. 新館構想について
9. そ の 他

報告事項

1. 次期システム導入スケジュールについて
2. 学術文献情報検索サービスシステムのUNIX化について
3. 平成6年度大型コレクションについて
4. そ の 他

◆ 人事往来

○ 辞 職

新 関 教 子 理学部図書掛 6.12.31

北海道大学附属図書館報「楡蔭」(ゆいん) 通号92号

平成7年(1995年)3月30日発行 発行人 附属図書館事務部長 遠藤勝久

編集事務 山本幾夫・阿部勝義・岡田 潔・菅原英一・佐藤清一・金子 敏・
岸本一志・三橋 修・松尾博朋・伊藤啓子・土田京子・柴森義晴

発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北8条西5丁目 Tel. 706-2967

印刷所 文栄堂印刷所 札幌市中央区北2条東12丁目 Tel. 231-5560・5561